

目指せ 男女共同参画社会

No.44

男女共同参画社会って 何だろう



私たちの意識や慣習、行動の中には「男だから」「女だから」という性の違いによって、生き方や選択の幅を狭めてしまっていることが多くあります。

しかし、これからの未来をより良いものにしていくためには、男女が共に対等なパートナーとして、社会のあらゆる分野に参画し、一人ひとりの個性や能力を發揮していくことが大切です。

一人ひとりが自分らしく輝くために、みんなで男女共同参画について考えてみましょう。

企画財政課 ☎73・3010

少年育成センター

自分の気持ちや思いを表現できる子に

子どものネット依存に関する問題がクローズアップされています。インターネットの使用時間が長くなり、すぐにキレて暴力を振るったり、自分の殻に閉じこもったりする子どもが増加しています。

文科科学省の調査によると、不登校の原因は本人に係る状況が全体の約4割を占めています。小学生では家庭に係る状況が相対的に多く、中学生・高校生では友人関係やあそび・非行が背景に潜むものなど、気持ちを素直に表現できないことが大きな要因となっているようです。

トラブルを未然に防ぐためにも、気持ちや思いを素直に表現できる子どもに育てたいものです。そのためには、まず大人がネット依存を理解することが大切で、一人で悩んでふさぎ込まず、信頼する人に勇気を持って

じんけん探訪48

ハンセン病回復者のこと

松本清張『砂の器』

松本清張の作品に『砂の器』があります。日本を代表する音楽家の和賀は、大臣の娘との縁談も決まり、絶頂感にひたっていました。そのとき三木が現れます。彼は元巡査で、和賀がハンセン病患者の子ともだったことを知っています。過去を知られて地位を失うことを恐れた和賀は、秘密を守るために三木を殺害します。

作品が新聞に連載されると、「ハンセン病差別を助長する」と全国のハンセン病関係者は懸念しました。映画化されて心配は現実となりました。子どもたちから石を投げられ放浪する、みじめな親子の姿が大映しされたのです。関係者が抗議して、映画の最後に字幕が挿入されました。「ハンセン病は、医学の進歩により特効薬もあり、現在では完全に回復し、社会復帰が

続いている。：戦前に発病した主人公のような患者は、日本中どこにもいない。

遺伝せず薬で簡単に完治

かつては「らい病」と呼ばれましたが、1873年にノルウェーの医師ハンセンがらい菌による感染症であることを発見して以来、ハンセン病と呼ばれています。らい菌が運動神経を侵す筋肉が萎縮して手足が変形し、視神経を侵すと視覚を失います。「不治の病」と恐れられました。今では薬で簡単に完治しますが、今は薬で患者宅の消毒と警察への届け出を義務付け、全国に療養所を設置して患者を収容する隔離策を進めたため、国民は「怖い病気」と誤解しました。

1943年にアメリカで治療薬が開発され、日本でも戦後は患者に社会復帰の希望が生まれました。しかし、政府は1953年、「らい予防法」を制定して隔離策を続けました。「らい予防法」は退所規定のない絶対隔離策で、1996年まで続き

まちづくり推進隊 Part.7

「NPO法人 まちづくり推進隊財田」

現在の会員数は60人。「あなげん安心部会」「ここに元気部会」「ふれあい交流部会」「まもろう環境部会」「広報部会」の5部会で構成されています。

発足当初からの継続事業に、「桜の郷計画」があります。財田町内でも特に景観の美しい戸川ダム周辺や塔重山公園に、会員やボランティアの協力をいっただいて、約600本の桜の苗木を植えてきました。今後、この桜が多くの人を癒やしとなるよう、守り育てたいと思っています。

他にも、救急救命講習会や防災訓練、景観保全のための竹や



▲みんなで力を合わせて桜を植えました



▲地元の中学生と一緒に活動。若い力がまちの活性化につながります

現在は「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」によってハンセン病差別は禁止され、自治体には啓発義務が課せられ、施設は一般開放されています。高松市沖の大島青松園では、今も70人弱の人が生活しています。身寄りがなくなってもありますが、今なお差別が強いために社会復帰できないのです。最近では、人権学習のために来園する人が増えています。

大島青松園



▲いまだに多くの人が生活する大島青松園 出典：国立療養所大島青松園ホームページ (http://www.nhds.go.jp/~osima/)

▼問い合わせ まちづくり推進隊財田 ☎67・3790